

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 142 号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2004.09.16 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

\*\*\*\*\*発行部数 1526 部\*\*\*\*\*

---

□ 目 次 □-----

<今週の提言>土づくりと耕畜連携 熊澤喜久雄

<旬を食べる―野良からの便り・9> “栗 (マロン)” 小泉浩郎

<79歳の意見>近藤康男博士 健康寿命105歳 原田 勉

<山崎農業研究所情報>

◇飼料用イネの現地検討会に出席して

<日本たまご事情>農水省への意見書 愛鶏園・齋藤富士雄

<編集後記・同人の近況報告>9月2日～9月15日

---

<今週の提言>土づくりと耕畜連携

---

有畜農業、農畜複合経営、地域複合経営、水田酪農等、耕種と畜産との結合と土づくりによる農業発展を望む声をよそにして、耕種と畜産の乖離が進んできた。それは同時に日本農業の危機の進行でもあった。

最近の口蹄疫・BSE問題、畜産廃棄物問題などを背景として、土地利用型畜産や有機畜産の拡大を求める声が大きくなり、飼料の自給率向上と耕地への堆厩肥の還元による地力向上を結合すること、すなわち耕畜連携を強めようとする動きが盛んになってきている。

有機物の循環的利用の促進による土づくりを基本理念に据えている環境保全型農業は、当然のこととしてこれを歓迎している。しかし、耕種農家の土を守る具体的施策は、農家の利益に立って、農民の要望に従って、進められるべきであろう。その点では自給肥料として位置づけられていた堆厩肥が、耕種部門から乖離した状態で規模拡大した畜産側により、外部から耕種農家に押しつける形で、販売肥料としてのみ推奨されてはなるまい。使用者側からみた場合の

堆肥の質の問題も軽視されてはならない。

最近好評を博している稲ホークロップサイレージの栽培と利用は耕畜連携の好事例であり、その引き続いての拡大を願うものであるが、稲わらの飼料的・敷き藁的利用の拡大や稲わら肥の水田還元促進、さらに飼料米栽培などの本格的拡大に至ってこそ、真の耕畜連携が展開したといえよう。

土地利用型畜産への回帰を主軸にした健全な畜産の発達と同時に耕種と畜産との正しい連携が全面的に発展し、食料自給率増加と食料安全保障への道が大きく開かれることを願わずにはいられない。

熊澤 喜久雄

山崎農業研究所会員、専門：土壌肥料

y.noken@taiyo-c.co.jp

---

<旬を食べる一野良からの便り・9> “栗（マロン）”

---

今年は栗の豊作である。金色の毬（針状）が、たわわに朝日に映える。秋の風物詩だが、生産農家には、その豊作を素直に喜べない。庭先価格（生産者価格）は、1キロ100円を割り70円だという。昨年の半値以下だ。これでは栗を拾う手間もでない。だから、栗が掃くほど落ちたまま、放置されている園が眼につく。

それでも東京・四谷のスーパーでは茨城産でキロ500円。もちろん厳選された2L級の粒揃いだが、ネット販売はキロ1,000円以上だ。農家の作るものはいつでもそんなものだ。諦めには慣れている。

栗は、栗のようにほくほくだと美味しいものの代名詞によく使われる。サツマイモを十三里という。栗より（九里四里）美味いからだという。マロングラッセは、フランスの栗を使った高級菓子だ。栗きんとん、栗ようかん、栗の渋皮煮、栗ご飯……果物の中では特徴ある使われ方をしている。

だが、旬の栗の最高は焼き栗だ。風呂の焚き口に栗を数個放り込む。そのままだと破裂して痕跡がなくなる。歯でオニ皮に傷をつけてこんがり焼く。香ばしさとホクホク感、舌先を火傷しながら頬張る。学校から帰っての楽しみだ

った。

だから、これだけの栗の産地なのに、焼き栗は、輸入の天津焼き栗しかないことに不満だった。ヨーロッパでは、日本の焼きいも屋のように、焼き栗売り屋台が秋から冬の風物詩になっている。なのに日本はとっていたら、最近日本栗の焼き栗が出回ってきた。だが、学校の帰り道、拾いたての栗を、風呂沸かしの手伝いをしながら、焼いて食べたあの味にはかなわない。

小泉 浩郎

山崎農業研究所事務局長

y.noken@taiyo-c.co.jp

---

<79歳の意見>近藤康男博士 健康寿命105歳

---

健康寿命とは、寝たきりでも生きている「平均寿命」と違う。自分のことが自分でできる、自立して生活できる寿命の年数である。

健康寿命の条件は（１）介助なしで食事ができる。（２）毎日の排泄が自分でできる。（３）爪切りが自分でできる。ということである。

「ピンピンコロリ」という言葉があるが、元気で長生きして最後はころりと逝く。誰でも、どこの老人も寝たきりで長生きしたくないという願いがこめられてこの言葉がある。

平均寿命では、男性の全国1位は長野県、女性では沖縄県が1位である。しかし、健康寿命では山梨県が日本のトップという。つまり山梨県はピンピンコロリ県という。

その理由は、自家製の「ほうとう」を家族みんなで食べること。それに、仲間同士が集まって「無尽」を楽しむという社会環境があることである。つまり、伝統的な食生活習慣とお年寄りが孤立しないための社会的ネットワークが山梨県では機能していることが健康寿命を長くしているという（↓文献参照）。

さて、近藤康男博士の場合はどうだろうか。あと4ヵ月で106歳になられるが、8月27日にお伺いしてお話を聞いた。食事も排泄も自分でできる。爪切りは弱視になってからダメになった。しかし、105歳の現在でも自分の身のまわりのことは自分でできる。健康寿命105歳という超長寿である。

この日の話題は、故郷・岡崎の三峰山や矢作川の思い出が多かった。昔のこ

とは良く覚えておられるが、思い出の人の名前は出てこない。

自宅の庭木の剪定や草花の話が多かった。歳をとると人よりも自然との付き合いや思い出の方が多いのか。自然の影響は深いものだった。

帰りがけ、散歩をかねて門まで送ると言われる。庭には玄関まえに花の大きい芙蓉がある。花を手でさわり自慢される。ドイツ・チューネン協会から贈られたドイツ柏の樹の成長ぶりに俺よりも大きくなったと満足されていた。散歩は両手に2本の杖をついて、ゆっくりゆっくりと歩かれ、門の所で握手をしてお見送り頂いたが、別れを惜しんでいつまでも手を振っておられ、やがてゆっくり玄関まで歩いて行かれた。

弱視になって読書も出来なくなったし、来客も少ないが、長男夫妻に助けられて毎日を悠々と生きておられる姿に感服するだけだった。

(参考文献:「健康寿命日本一、山梨県の理由・ほうとう・無尽」毎日ライフ 2004.9 )

[http://www.mainichi.co.jp/life/life/menu\\_01/2004-09/2004-09-00.html](http://www.mainichi.co.jp/life/life/menu_01/2004-09/2004-09-00.html)

執筆者:山梨大学医学部「社会医学講座」・山縣然太郎教授

<http://www.yamanashi.ac.jp/education/medical/social/heal0sci/home.html>

農文協図書館ニュースから「近藤康男博士・国際チューネンセンター名誉総裁となる:チューネン博物館バルツ館長来訪」

2002年4月、ドイツ・チューネン協会からドイツ柏の樹を贈られる。

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/200204/news2.html>

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

---

<山崎農業研究所情報>

---

◇飼料用イネの現地検討会（耕畜連携の循環型農業をめざす）に出席して

9月1日、千葉県千潟町主催の「稲ホールクroppサイレージ（WCS）」の現地見学・検討会に山崎農研から3名が参加した。WCS給与家畜（牛）堆肥の投入圃場の(1)（食用の）コシヒカリ栽培、(2)ロングマット苗利用の飼料

専用品種移植栽培、(3)飼料専用品種の直播栽培、及び(4)飼料用イネ刈取りロールベール作業などを見学。

検討会では「専用品種・低コスト栽培法の利点、問題点と今後の対応」、「WSCの肉牛への栄養面からの給与技術」、「酪農経営等におけるWSCの利用状況と評価」などが討論された。家畜にWSCを給与しその堆肥を水田に戻すという、有機資源利用の上記のような一連の農法を循環型農業と称しているが、このような技術が全国に定着すれば、環境に配慮した農業として期待される。(K. Y. I)

(注1) 稲ホールクロップ：稲の子実(コメ)が完熟する前に子実と茎葉を一緒に包装密封し、嫌気的条件下のもとで発酵させ、貯蔵飼料とする。「稲発酵粗飼料」とも称される。

(注2) ロングマット苗利用：ロングマット苗利用：イネ苗をマット(布)上に育てたものを田んぼにカーペットを拡げるように移植する。マットは腐植し分解する。

(注3) ロールベール作業：刈ったイネをロールに丸め、これをビニールシートで包装しサイレージ化する。

---

#### <日本たまご事情>農水省への意見書

---

農水省が広く一般に「鳥インフルエンザに対する防疫指針(案)」に意見をもとめていたので少し固い内容ですが……

#### 高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)に関する特定家畜伝染病防疫指針(案)に対する意見書

1、2004年1月、日本で発生した4件のHPAIは関係機関の努力によって防圧されたが、これはむしろ奇跡的に成功した事例と考えたほうが良い。

ここ数年世界的に大流行しているHPAIの事例をみると、イタリア、オランダ、メキシコ、北アメリカ、カナダ、中国、韓国、タイ、ヴェトナム……いずれも日本のように初発農場の段階でくい止められた事例は少なく桁違いの規模で大発生している。

むしろこのHPAIは家禽の密度の高いところに一度発生したら制御不能になる事例のほうが多い。

2、この防疫指針（案）は日本の稀有な成功事例をもとにして作成されたもので、大規模発生の事態を制御する視点を欠いている。

我々養鶏生産者がもっとも心配するのはこの点で、大規模発生に対応出来る防疫指針とは言いがたい。

むしろこの防疫指針（案）で制御できるHPA Iの規模であれば幸運であるとさえ考える。

3、海外で大規模なHPA I発生を経験し、莫大な損害を受け、それをもとに対応策を考え出し、実行し成功した国々がある（イタリア、香港、メキシコ、アメリカ）。

これ等の国々ではいずれも、ワクチンを選択肢のひとつとして重要視している。

この防疫指針（案）ではその海外の事例を学習しているとは思えない、それどころか農水省は「ワクチン害悪論」を先行させ、そのデメリットのみを強調しているのは理解できない。

4、防疫指針ではHPA Iが続発した場合のみ、ワクチンの使用を検討しているが、生産現場での経験からすればそれはほとんど意味をなさない。

用意されているのは不活化ワクチンなので注射に要する時間、効き目を現すに必要な日数を考えれば、これは殆ど間に合わないと考えたほうが良い。

HPA Iの初発と同時に即刻周辺農場にワクチン接種をすべきである。それでも間に合うかどうか懸念されるが、感染拡大を食い止めるには他に方法が無いことを経験国の事例は示している。

5、日本は優れた鳥インフルエンザのワクチンを開発、製造できる十分な能力がある。官民力をあわせ世界に先がけ鳥インフルエンザワクチンの開発を急ぐ必要がある。

それが日本のためになり、世界に貢献できる道と考える。

生産現場の経験からいえば、今まで困難な感染症も皆ワクチンで解決してきた。

日本にそれが出来ないわけが無い。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp>

---

<編集後記・同人の近況報告> (9月2日～9月15日)

---

先日、埼玉県所沢市にある観光ぶどう園に家族で出かけた。空梅雨で高温が続いた今年のぶどうは、味はたいへんよいが、雨が少なかったため例年に比べて少々小粒だという。このぶどう園にはたいへん日当たりのよい、山の頂上の畑があるが、この畑では8月末の台風で落とされた房もけっこうあったそうだ。自然環境に左右される農業のむずかしさをあらためて感じさせられた。

(山崎農業研究所会員・田口 均)

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

- 1、件名(見出し)を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。
- 5、JIS X0208 規格外の文字(機種依存文字)のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

---

◎投稿アドレス変更のお知らせ

---

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

[y.noken@taiyo-c.co.jp](mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp)

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

-----

次回 143号の締め切りは9月27日、発行は9月30日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願ひ致します。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html)

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 142 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag2.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html)

2004.09.16（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

\*\*\*\*\* ここまで『電子耕』 \*\*\*\*\*